



首都東京のビル群に囲まれる日比谷公園

## 土木遺産の香 第65回

# 東京の洋風化を支えた「日比谷公園」 東京都・千代田区



大日本コンサルタント株式会社 / 総務部 / 総務室  
遠藤徹也 / ENDO Tetsuya  
(会誌編集専門委員)

### 首都東京の中央公園

日比谷公園は、北は皇居外苑、西は霞が関の官庁街に接し、有楽町や銀座にも程近い。まさに首都東京の中心部に位置する公園である。ほぼ長方形で16ha程の敷地は中央公園としては決して大きくないが、園内には高木約3,100本、低木約10,100本が生い茂り、花壇、草地広場、池、大噴水、テニスコート、公会堂、野外音楽堂、図書館など数多くの施設を配している。都心とは思えない程の落ち着いた佇まいとその立地故、昼時には多くの会社員が憩いの場として利用している。

日比谷公園の開園は1903(明治36)年で、100年以上の歴史を有する日本初の洋風公園であると同時に、全国の都市公園のモデルとしての役割を果たしてきた。この公園は東京市区改正設計に基づき、陸軍の練兵場跡地を公園として整備したのが始まりである。なぜ、この地に日比谷公園が誕生することになったのだろうか。

### 日本の公園造成の歴史

そもそも、日本における公園制度は1873(明治6)年の太政官布告第16号が始まりで、府県に対し、公園という制度を発足させるのでふさわしい土地を選定の上、伺い出るよう通達が出された。そこで、当時の東京府は、浅草の浅草寺、上野の寛永寺、芝の増上寺、深川の富岡八幡社、王子の飛鳥山を上申し、5つの公園が誕生した。この制度では、群衆遊観の場所、万人偕楽の地を公園の主な機能としていたが、これらの遊園機能は既に江戸時代の社会に定着していた。

つまり、明治維新後の公園は、伝統的な寺社の境内の転用によって誕生しており、既にあった賑わいの場所を公園と見做したこれらの公園と、都市計画の一部としてゼロから整備された日比谷公園とでは、誕生の経緯は大きく違うものであった。日比谷公園が都市公園のモデルとして位置付けられる理由はそこにある。



写真1 第二花壇より東側を望む。正面左のビルは帝国ホテル、右のガラス張りのビルが建つ場所にはかつて鹿鳴館があった



写真2 開園当日の雲形池。開園当初は幼木が植えられ、日射病を起こすようだとの批判から『霍乱公園』と呼ばれた

### 公園以前の風景

江戸時代初期まで日比谷公園一帯は漁村で、海が入り込む日比谷入江であった。その後、入江は神田山を切り崩した土で埋め立てられ、鍋島や毛利などの大名屋敷が建ち並んだ。但し、埋立地であったため、低地で排水が悪く、雨が降ると泥濘になったといわれている。

明治時代になると、旧幕府時代の諸侯の藩邸は新政府によって土地され、1871(明治4)年に現在の公園区域及びその周辺は陸軍操練所、後の日比谷練兵場として使用されるようになった。1869(明治2)年の版籍奉還によって広大な諸侯の藩邸を上地させた新政府であったが、これらの土地を直ちに有効利用するには、練兵場とするより他に使い道がなかったものと考えられる。

やがて1883(明治16)年には、外務卿井上馨によって推進された欧化政策の一環として、近接地にロンドン出身の建築家ジョサイア・コンドルが設計した鹿鳴館が完成する。そして周囲に建物が建ち並ぶようになると、砂埃を上げる練兵場は、もはやこの地にふさわしくなくなってきた。そのため、1888(明治21)年頃から練兵場は3km程離れた青山の地に移転した。

### 公園誕生の経緯と消えたバロック都市計画

1889(明治22)年に東京市区改正設計が告示された。これは内務省主導で行われていた計画であり、日本における都市計画の始まりというべきものである。その公園の部には「第一日比谷公園 麴町区日比谷練兵場ノ内 面積凡五萬四千四百坪」とあり、これによって日比谷公園の計画が正式に誕生した。これには王子公園まで計49カ所の公園の位置と面積が示されており、日比谷公園が冒頭に記載されたのは、東京の中央公園として最も重視されていた証拠である。しかし、財政難のため、このうちのほとんどが実現しなかった。

では、東京市区改正において練兵場跡地を公園とすることになったのはいつであろうか。東京市区改正委員会の議事録によると、1888年11月に開催された第17号会議において、練兵場跡地を公園にしてはどうかとの提案があった。発言したのは、後に土木学会初代会長に就任した内務二等技師の古市公威博士と、東京府区部会議員の芳野世経で、審議の結果、日比谷公園の一項を追加することがその場で決定されている。

それに遡ること3年前、1885(明治18)年にコンドルが立案した官庁集中計画においても、練兵場跡地を公園とすることが示されている。そもそもこの官庁集中計画は、近代的な国会議事堂や諸官庁建築が整備された姿を諸外国に示そうと、馨がコンドルに作成させたものであった。コンドルの計画は2つあり、そのうちの1つに日比谷練兵場内の東側を大公園にする計画が描かれている。日比谷練兵場内の地質調査結果についても触れられており、練兵場内の地下には自然砂層が広がり、砂層は練兵場の西の高台から東へと傾斜し、西側では地下約10ft(3.0m)、東側では約70ft(約21.3m)の位置にあること、地表から砂層までは軟弱粘土層であることが報告されている。その結果を踏まえ、地盤が軟弱な練兵場の東側を公園とする計画としたのである。

しかし結局のところ、コンドル案は馨に採用されなかった。その後、コンドルに代わって立案を委ねられたドイツ人技師ベックマンによる壮大なバロック都市計画や、同じくドイツ人技師ホープレヒトとエンデによる計画が立案されたものの、諸外国との不平等条約改正交渉を失敗した引責により、馨は1887(明治20)年に失脚してしまう。

そこで、翌年2月に内務省臨時建築局総裁に就任した山尾庸三は、ホープレヒトとエンデによって立案された練兵場跡地への官庁街計画に従って起工する。しかし、劣悪な地盤条件によって全体計画の修正を迫られ、同年9月には練兵場跡地側の軟弱地を公園とする修正計画が上申された。





図1 設計図案 ~1898年公園改良取調委員会(長岡安平)案



図3 設計図案 ~1900年東京市吏員(5名)甲案

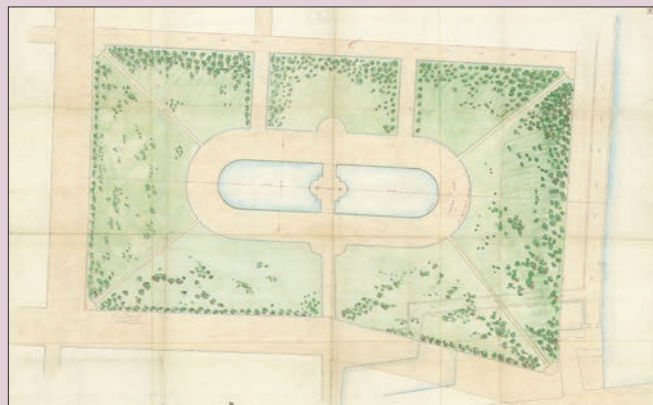


図2 設計図案 ~1899年辰野金吾案

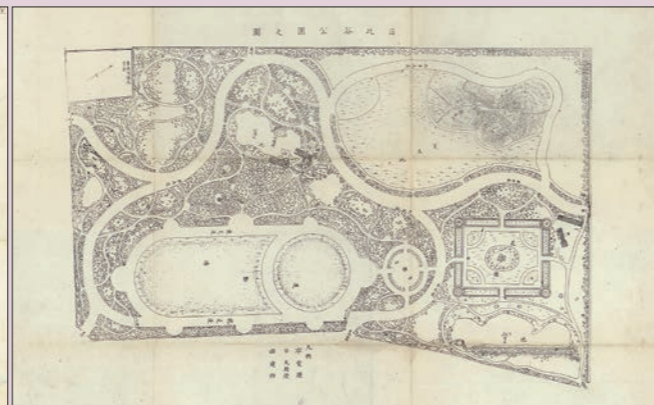


図4 採用された本多静六による設計案。現在に至るまで地割は殆ど変更されていない

こうして、失脚によって警主導の官庁集中計画が後退するなかで、日比谷公園の計画は内務省主導の東京市区改正に取り込まれていく。そして、ここが軟弱地盤で建築不適の地であるとの判断によって、日比谷公園が誕生することになったのである。

### 日の目を見なかった数々の設計案

日比谷公園の設計の中心となったのは、後に日本の公園の父と称される本多静六である。静六は、ドイツの公園を範としながらも一部に日本庭園の手法を加え、洋風7分、和風3分の総合的近代公園として1901(明治34)年に日比谷公園の設計案を纏め上げた。しかし、これに至るまでに多くの設計案が作成されては、日の目を見ずに消えていった。

まずは1894(明治27)年、東京府知事に対し日本園芸会に設計を委託するよう出願があり、同会副会長の田中芳男の1案と学芸委員の小平義親の2案が提出された。次に1898(明治31)年、東京市会議員4名からなる「公園改良取調委員、開設意見」市会議長報告で「公園改良取調委員会(長岡安平)案」が提出された。これは、中央を芝生地とし、周囲にカラタチ、シノキ、雑木、カエデなどを配植し、

電灯かガス灯を設置する設計案となっていた。この案は翌年の市参事会で審議され、「本市公園は従来社寺・仏閣を主とするもので、日比谷公園は市自ら経営する最初の公園である以上なるべく慎重を要するから、設計考按を辰野博士に依頼し、その報告を待って設計に着手すべし」と、滞欧経験を持つ帝国大学工科大学長の辰野金吾博士に設計を依頼することで、洋風公園への期待が明確に示された。これを受け、金吾は同年に広場公園式の設計案を作成したものの採用に至らず、次の年には東京市吏員による設計案が出されたが、これもまた不採用となった。

こうして、最初の設計案提出から6年の月日が流れてもなお設計案が決まらなかったのは、新しい中央公園に対する大きな期待があったことと、公園設計や実施案に関する経験が不足していたことが大きかった。

そうこうしているうちに、市会からの圧力が強まり、また一般市民からの批判も出てきたため、市は1900(明治33)年に日比谷公園造園委員会を設置し、林学博士の静六、軍医総監の石黒忠意、日本園芸会副会長の福羽逸人、造園家の小沢圭次郎に設計を依頼し、静六がその中心となった。そこには、設計案が不採用続きで困り果てた金吾が、た

またま部屋を訪れた静六に設計を押しつけたという逸話が残されている。静六は、ドイツ留学時に西洋の公園を見た経験と公園に関する蔵書数冊を手掛かりに、初めての公園設計に取り組んだのであった。

### 静六による和魂洋才案

静六の案は、これまで提出された各案の共通点を上手く

取り込んだものとなった。1899(明治32)年、外圧によって着工せざるを得なかった市は、決定案を持たないままに長岡安平案に基づいて道路、広場排水、外柵などの公園の輪郭造成を始めていた。さらに、その工事に合わせる形で翌年に東京市吏員案が設計されていた。こうした現実を踏まえ、静六の案は両案の入口配置を踏襲している。

園内を曲線で結ぶ広路を設け、東南部の運動場はドイツのコーニッツ市営公園運動場の意匠に倣って設計された。また、西南部の樹林地帯はドイツのベンゼン市立病院遊園を、雲形池はドイツのドレスデン園芸学校教授であるベルトラムの図案に依ったものであり、留学先のドイツの影響がうかがえる。西北部は池の掘削土を盛って小さい丘を築き、その南は芝生地とした。ここには日本庭園を予定していたが、市会で否決された。その他にも、東北部の有楽門近くには旧江戸城の石垣土塁を残し、その内側に心字池を造ることで、日本風林泉の趣を漂わせている。

静六が設計案を提出してからも様々な意見が出たが、無事に市会を通過し、1902(明治35)年によろやく着工した。予算は28万円から17万5千円に減額されたものの、既に行われていた地ならしや外柵などの工事費を加えると、日比谷公園の開設には30万円(現在の金額にすると約5億円)近くを要したことになる。

造園工事の監督は静六自らい、助手の本郷高德が詳細図面を作成した。かくして、着工後1年余で一応の工事が竣工し、日比谷公園は1903年6月1日に仮開園したのである。これは1889年の東京市区改正設計告示の14年後のことであった。

### 開園後の風景

開園後の日比谷公園は、日本初の洋風公園として明治末の東京の洋風化を支えてきた。花壇にはチューリップやパンジーが植わり、洋風喫茶店の松本楼が来店した。さらに、バンドステージ式の小音楽堂では公園奏楽が行われた。欧米



写真3 日比谷見附の石垣と心字池。石垣は江戸城内濠のもので、1627(寛永4)年に浅野但馬守長晟が築いた



写真4 松本楼の横にそびえる首賭けイチョウ。切り倒される予定だったイチョウを静六が自身の首を賭けて移植した



写真5 公園東側中央部に位置する日比谷門。従来の庭園とは違い、各門には扉が設けられなかった

では当たり前であった洋花、洋食、洋楽を提供する日比谷公園は、ハイカラに出会える場であった。

それから100年以上の時が経った現在も、多くの人々が日比谷公園を訪れる。毎年多くのイベントが開催され、園内はいつも人々が集い賑やかである。これからも、日比谷公園は変わらぬ姿で様々な人々を受け入れる都心の貴重な空間としてあり続けるであろう。

- <参考資料>
- 1) 「日比谷公園」前島康彦 1980年 郷学舎
  - 2) 「日比谷公園100年の矜持に学ぶ」進士五十八 2011年 鹿島出版会
  - 3) 「日本文化になった洋風公園」公益財団法人東京都公園協会 2013年
  - 4) 「日比谷公園の成り立ち」山口智 2004年 都市研究センター URBAN STUDY Vol. 38
  - 5) 「明治期東京における公共造園空間の計画思想」小野良平 2000年 東京大学農学部演習林報告 第103号
  - 6) 「明治の東京計画」藤森照信 1982年 岩波書店
  - 7) 「コンドルの官庁集中計画に関する研究」清水英範 2012年 土木学会論文集D2(土木史) Vol.68 NO.1

- <取材協力・資料提供>
- 1) 東京都建設局公園緑地部
- <図・写真提供>
- P44上、写真1、3~5  
遠藤徹也  
図1~4、写真2  
公益財団法人東京都公園協会